

## 場面重視の英作文

橋本二郎\*      中村順良\*  
(1992年12月8日受理)

Jiro HASHIMOTO and Yukiyoishi NAKAMURA  
Toward a Situation-Oriented English Composition for College Students

「キーワード」英作文, 場面, 真似る, 創る

### 0. はじめに

英作文には, その基本的側面として, 「真似る」ことと「創る」ことの二つが認められる。「真似る」ことの中には, 個々の単語の発音・綴り, 単語どうしの結び付きに関する制約, 句の配列順序を覚えることなどが含まれる。これらを創作することは許されない。さらに, 英語特有の句読法も真似の対象である。一方, 「創る」ことの中には, 英文に盛り込む内容を考えることはもちろん, その内容を表わすための単語, 型を選択することをも含めてよい。

英語学習の初期の段階では, 英作文に限らず, 真似ることに多くの時間と精力が注がれる。この時期には, 十分な時間をかけて正確に真似られるようにすることが肝要である。その点, 暗唱は, 多くの種類の真似を総合的・重層的に含み, 非常に効果的な学習法であり, 教師は生徒に推奨すべきである。また和文英訳は, 真似をより確実なものにするためにも有効である。

しかしながら, 上述の意味での真似は, 初歩的学習者にのみ求められるべきものではなく, 英語の学習が続く限り続くものであることに注意しなければならない。したがって, 大学の英作文の授業においても, 「真似る」という要素を取り入れることは十分に意味のあることであり, それを排除する理由をみつけることの方がむしろ困難である。

一方, 英作文において, 「創る」ことは, 真似ることに劣らず重要である。初歩的段階を過ぎたならば, あるいは初歩的段階においてすら, 自分の考え, 感情, 身の回りのことなどを, 自分が知っている単語, 型の範囲内で工夫して表現してみることは, 英語による柔軟な表現力を養うためばかりでなく, 英語に対する鋭い感覚を育てるためにもきわめて有益である。それは, 発信型英語学習の原点をなすものであるとも考えられる。大学の英作文の授業も, なんらかの仕方で「創る」という要素を取り入れた方式が望ましいであろう。

本稿は、「真似る」と「創る」を統合することを目指して行なわれた英作文の授業〔岩手大学教育学部英語科1992年度後期開講の英作文Ⅱ（授業の担当者は橋本）〕の実践報告である。

### 1. 英作文的に読む

真似による英作文の上達には、できるだけ多くの、しかも標準的な英文を読んだり聞いたりすることが不可欠である。多量の英文を読んだり聞いたりすることによって、真似られるべき対象が、自然な形で無意識的に蓄積されていくからである。さらに、ときには「英作文的に英文を読む」ことが有効である。英文を英作文的に読むというとき、それは、読んで内容が理解できればそれで事足りるとするのではなく、「同じ内容を自分だったらどう表現するか」、「他の言い方はできないか」、「なぜ他の語ではなくこの語が用いられているのか」といった問いかけを自分にしながら読んでみることを意味する。書く側の身に自分を置いて英文を読んでみることである。

授業では、英作文的読みの教材として、シドニー・シェルダン (Sidney Sheldon) の作品 *If Tomorrow Comes* (1985, Warner) を採用した。この作品をとりあげた理由は、現代英語で書かれていること、難解な表現が少ないこと、英作文に利用可能な表現が数多く含まれていること、翻訳、ビデオテープを内容把握の一助に利用できること、などである。

受講者は、次回の授業まで、上記テキストの指定された30～40ページ読んでくことを求められる（一日当たりになると5～6ページ）。週当たりこれだけの量を読むのはかなりの負担とも考えられるが、翻訳なども利用できるものでそれほどではないであろう。また、慣れによっても次第に負担は軽減されることが期待できる。

さらに、毎回指定した範囲から、英作文に利用できる表現・構文等を含む英文を、問題の箇所に下線を施した上でテキストに現われる順に抜き出し、課題を受講者に配布する。「下線部分を用いて、あるいは下線部分を他の語（句）と入れ替えて英文を創りなさい。」というのが課題である。つまり与えられた英文を部分的に「真似」た英文を「創っ」てくることを課題として与える。「創る」のであるから、辞書や参考書にのっている例をそのまま写すことではない。短文ではあっても、自分自身の体験、想像などをもとにして自分自身の英文を創ることを求める。このような課題を与えることによって、ある程度まで「真似る」要素と「創る」要素を同時に英作文の授業にとりこむことが可能になると思われる。

次に示すのは、受講者に課した課題の一例である。

#### English Composition II Exercise (3)

(pp. 77-111)

Use or replace the underlined part(s) to make your own sentences :

3-1 The convicts who worked in the kitchen had access to those meals, and they took full advantage of it. (78)

3-2 The prisoners knew everything that was going to happen long before it occurred. (79)

- 3-3 The reality was so startlingly different that the prisoners referred to the pamphlet as the prison joke book. (79-80)
- 3-4 How can the authorities allow it to happen?(80)
- 3-5 the warden had given it considerable thought. (91)
- 3-6 He had an odd, unreasonable feeling that he owed this woman something. (93)
- 3-7 Ernestine was staring at her with her mouth open. (97)
- 3-8 It became obvious to her that none of the escape plans he had discussed with Ernestine would work.
- 3-9 She slept little, for her mind was busy planning. (97)
- 3-10 The thought of what the giant bull-dyke had in mind for her made her physically ill. (99)
- 3-11 To tell you the truth, I might be a little jealous. (101)
- 3-12 Sometime after midnight Tracy heard the door of her cell being opened.
- 3-13 the word was out that Tracy was being transferred to Big Bertha's cell (104)
- 3-14 it was no accident that no one had mentioned anything to Big Bertha about Tracy's escape plan (104)
- 3-15 The Blood drained from Tracy's face (111)

( ) 内の数字は、使用テキスト *If Tomorrow Comes* 中のページを指す。

## 2. 英作文と場面

どのような文も必ず広い意味での場面（それは言語的である場合もそうでない場合もある）をともなって用いられるのであるから、英作文にあたっては、その点に留意することにすることはないのであろう。英文が使われている場面を把握することによって、その英文のより深い理解が可能となり、逆に英文を書いたり話したりする場合は、その英文が使われる場面を想定しながら構成することによって、談話的観点からも問題の少ない英文を作ることが可能になると考えられる。英文を作る過程で、英文を断片的・孤立的ではなく、広い意味での場面の中に置いて考えるようにすることによって、個人的・具体的で生き生きとした英文を組み立てる力が養成されていくと思われる。

場面ということでは、真似の模範例としての英文も場面性の豊かなものであるのが望ましいであろう。今回の授業において、基礎資料として小説一冊を用いることにしたのは、模範英文にできるだけ場面性を持たせることを考えた結果である。

第1節に例を示した課題では、もっと狭い意味での場面をもできるだけ取り入れるように配慮した。例えば、3-6の例についていえば、これは、feeling という名詞がいわゆる同格の that 節を取っている場合であり、その組み合わせの習得がねらいであるが、そ

の部分だけに下線を引かずに、had an odd feeling that というより大きな単位をとりあげたのは、使用できる枠に制限を与えることによって逆に場面性を豊かにできると考えたためである。また、an odd feeling を注目することによって、feeling と形容詞の連語関係(collocation)にも注意を向けて欲しいというひそかな願望も込められている。(課題のreplace という指示部分によってodd 以外の形容詞を使うことは許容されているのではあるが。)

授業そのものの進め方はおおよそ次の通りである。第1節に示した課題の各英文につき1～2名を指名し、各自が用意してきた短い英文を板書させる。そして、それぞれの英文について、どのような場面設定のもとに各英文を作ったのかを簡単に説明してもらう。それに続いて、筆者が英文の誤り、問題点、疑問点等を指摘し、その場で不明の箇所については、インフォーマントによる確認などを経た上で、次回の授業であらためて解説する。

以下、参考までに、受講者が板書した英文の例をいくつか紹介し、その英文についての問題点などを〔コメント〕欄に記すことにする。〔 〕内の数字は上掲の課題の例文の番号に対応している。

[3-2] My uncle knew that he had cancer of the stomach long before we told him about it.

〔コメント〕 knew は had known と過去完了形に変える。

[3-3] They refer to Michaelangelo as genius.

〔コメント〕 refer to ...as... は、人や物をどう呼ぶかを表わす時に用いるので、性質を表わす genius を as の次に用いるのは不適當。

[3-6] I have an odd feeling that there was a childhood of my mother.

(お母さんにも子供時代があったというのは変な感じがする。)

〔コメント〕 feeling thatと直接続けるのはどこか不自然。マイケル・アンハー氏(岩手大学教育学部外国人教師)によれば、I have an odd feeling の次に thinking あるいは when I think などを挿入することによってこの不自然さは解消される。さらに、that節の中は、my mother had a childhood のように変える。

[3-7] She was hearing the song with her eyes closed.

〔コメント〕 聞くは聞くでも、この場合は意識的行為と考えられるのでlisten to が適當。アンハー氏にも確認。

[3-11] To tell you the truth, I had been thinking that you were a bit conceited. But I noticed that it wasn't you but I that was conceited.

[3-15] As my secret came out, the blood drained from my face.

以上の英文などをみて気が付くことは、場面設定に関してそれなりの工夫がみられるということ、しかし、どの程度具体的な場面設定を行なうことができているかということに関しては、かなり個人差がある。しかし、これは英語とは次元を異にする問題と考えなければならないであろう。

### 3. まとめ

今回の授業で明らかになった問題点もある。たとえば、課題の中に取り上げた英文を受講者が十分に理解していなかったり、あるいは誤解したために、意図した真似が達成されないことがしばしばおこった。それは、テキストの指定された部分を読んできていないことが原因である場合もあるが、他方では、基礎的英語力、特に、英文法の知識が欠けているためである場合も少なくない。今回の授業では、課題の中の個々の英文について、文法的事項も含めて、事前に説明を加えることは一切行なわなかったが、最低限の説明を最初に与えておくことによって未然に防ぐことができた誤解もあったように思われる。

今回の授業においては、基礎資料として小説を用いたが、どのような資料を用いようともそれぞれに利点・制約があることはいうまでもない。小説に頻繁に現われても学術論文等にはあまりみられない語、構文、文体などがあるし、さらに、小説であっても、地の部分と台詞の部分では大きな違いがみられるということも当然である。上記の方法を採用するにしても、目的に応じて基礎資料の選択を変える必要も生じてくるであろう。さらに、基礎資料として小説以外のものを用いた場合、今回取り上げた方法にどのような修正を加える必要があるかなどの問題も残された課題である。